

戦前期

昭和元(1926)年～昭和12(1937)年頃

関東大震災の大損害から立ち上がる

昭和の時代が幕を開けたのは、未曾有の被害をもたらした関東大震災から3年後のこと。

神奈川県西部を震源とした関東大震災では、当時の震度階級で最大の震度6を観測した揺れが神奈川県のほぼ全域を襲い、多くの地域が壊滅的な被害を受けました。

昭和元年の神奈川県は、土地の区画整理や道路の改修など、復興への道のりを歩みはじめたところでした。

県議会議員選出で初の普通選挙が実現

明治時代から大正時代に行われていた選挙では、一定額以上の納税をしている満25歳以上の男子にしか選挙権は与えられていませんでした。

しかし、大正デモクラシーの勢いに乗って普選運動が盛り上がりを見せ、大正14(1925)年には法律が改正されました。これによって、昭和3(1928)年に実施された神奈川県議会議員選挙では納税要件が撤廃され、有権者が大きく増加しました。

地域の強みをのばしていく

昭和のはじめ頃には、現代にも通ずるような地域の特色が生まれ始めていました。

たとえば、横浜や川崎といった京浜地域は、大量消費地である東京と距離が近く、交通の便がよかったので、工場の建設地として注目されていました。

また、相模湾沿いを中心とした湘南地域は、自然や社会的条件に恵まれて、住宅地、観光地、保養地として人気が出ていました。

県では、そういった地域の成長を支え、県民の方々の生活をより良くする施策を展開していきました。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ

県庁舎再建

震災復興のシンボル



四代目県庁舎(昭和3年) 大林組所蔵

県庁本庁舎の歴史と その魅力



四代目県庁舎新築工事(昭和2年頃)

(小尾嘉郎氏関係資料所収 県公文書館所蔵)

現在の神奈川県庁本庁舎は、四代目県庁舎として関東大震災後の昭和3（1928）年に建てられました。鉄骨鉄筋コンクリート造り地上5階地下1階建てで、その中央部には建物のシンボルである塔が立ち上がっています。粗面タイルと幾何学模様の装飾からなる外観は、当時流行していたアール・デコ様式の影響を色濃く感じさせるとともに、建物内部ではかつての貴賓室や議場などに創建当初の面影が残されています。

昭和の初めに建てられ戦災を乗り越えたこの本庁舎は、現在国の指定重要文化財にもなっている重要な歴史的建造物です。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ

昭和初期の県議会議員選挙

港北区 飯田助丸	磯子区 崎村力二	磯子区 耳浦善二	磯子区 佐藤安蔵	磯子区 小沢二郎	磯子区 松尾常一	磯子区 堀内万吉	磯子区 佐藤賢治	磯子区 新堀源兵衛	磯子区 石渡清作	磯子区 大道寺公	中区 大竹新三郎	中区 上条勝	中区 阿部源司	西区 田上松衛	西区 白幡万平	神奈川区 佐藤一馬	神奈川区 館豊次	磯見区 河野義三郎	磯見区 川畑孝蔵
三浦郡 久野次郎	小田原市 星野増蔵	小田原市 原徳太郎	藤沢市 鈴木竹次郎	藤沢市 鈴木一良	藤沢市 松岡正二	鎌倉市 鈴木亀治郎	平塚市 鈴木亀治郎	平塚市 工藤才蔵	平塚市 横山三佐二	平塚市 神野長太郎	川崎市 市川健郎	川崎市 笠井健郎	川崎市 石川栄三郎	川崎市 羽田徳治郎	川崎市 吉井市蔵	川崎市 秋山徳雄	川崎市 安藤馬吉	川崎市 鈴木角蔵	川崎市 小川要
津久井郡 加藤詮	愛甲郡 難波誠三	愛甲郡 加藤誠治	足柄下郡 木村久治	足柄下郡 中井一郎	足柄上郡 鎌和田一二	足柄上郡 島崎重太郎	足柄上郡 沖津くら	中郡 加藤喜太郎	中郡 加藤高次郎	中郡 加藤重忠	中郡 加藤重忠	中郡 加藤重忠	中郡 加藤重忠	中郡 加藤重忠	中郡 加藤重忠	中郡 加藤重忠	中郡 加藤重忠	中郡 加藤重忠	中郡 加藤重忠

昭和22年に行われた選挙で当選した60名の議員

急増した有権者数

大正14（1925）年に普通選挙制度が始まり、選挙権の納税要件が撤廃されすべての満25歳以上の男子が対象となり、地方議会に大きな変化をもたらしました。

昭和3（1928）年、普通選挙制度施行後に、初めて実施された選挙では、有権者数は大正13（1924）年の8万9千余人から、28万2千余人まで急増しました。

昭和22年（1947）年には、地方自治法が制定され、県議会に常任委員会、特別委員会を設置して部門別、専門的に案件を審査することが可能となり、議会の権限が大幅に強化されました。



昭和3年の現県庁舎完成当時の議場
現在は県庁大会議場として使用されています。



昭和41年完成の現在の議場

昭和
100年

かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ

県立金沢文庫の開館

金沢文庫の被災と復興計画

鎌倉時代の武家文庫に起源をもつ金沢文庫は、伊藤博文により明治30（1897）年に再興されましたが、関東大震災で被災します。昭和3（1928）年、池田知事は昭和天皇の即位記念事業として金沢文庫の復興を計画しますが、不況の最中であり、建設費の半額を寄附金で賄うよう、県議会から求められました。

寄附と復興の実現

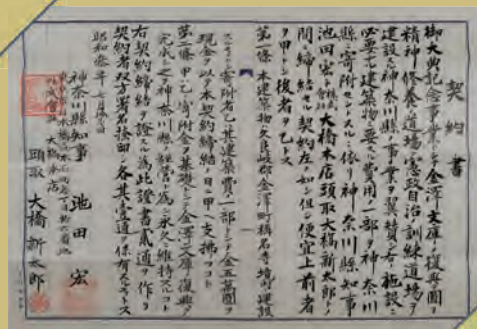
池田知事は、実業家の大橋新太郎に寄附の相談を持ちかけ、大橋は、全額を一人で寄附することを快諾します。

こうして金沢文庫は、昭和5（1930）年8月、称名寺の境内に、新たに県立の施設として復興を果たしました。



池田宏知事

大橋新太郎



寄附契約書

開館後の県立金沢文庫

その後、職員や外部の研究者により、称名寺から県立金沢文庫に移された資料の調査が行われ、日本の歴史や文化史などを塗り替えるような資料が次々と発見されました。

平成2（1990）年には現在の施設へ移転し、2万点を超える国宝を有する歴史博物館として、本年、開館96周年を迎えます。



県立金沢文庫(旧館、昭和5年建築)



現在の県立金沢文庫

写真下の文字は、「神奈川縣御大典記念事業トシテ知事池田宏氏ト實業家大橋氏トニヨリ再興サレシ金沢文庫（昭和五年十一月横鎮第十四號檢閲済）」



かながわ「昭和100年」
つながる心、ともに未来へ

県営水道（湘南水道）創設



当時の水道工事の様子（鉄管の運搬）

日本最初の県営広域水道

県の南部、湘南地方は、気候もよく、早くから住宅地、観光地、リゾート地として発展していました。

この地方には民間会社経営の水道があったものの、井戸水の利用も多く、水質不良や水量不足で困窮していました。

そのような中、地元市町村からは、水源の開発、財政上の困難により、県営による上水道事業実施の要望がありました。

そこで県は、新規水源を相模川下流の寒川地区に求め、日本最初の県営広域水道として、神奈川県営水道を創設しました。



当時の水道工事の様子（水道管の埋設）



創設当時の水道事務所（湘南）

昭和
100年

かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ

京浜工業地帯の誕生と発展



東亜建設工業株式会社 提供



東亜建設工業株式会社 提供

▲ 安善町全景(昭和3年ごろ)

◀ 「京浜工業地帯の父」浅野総一郎

浅野らが築いた礎と
県営事業による拡張

昭和期に日本経済を支えることとなる京浜工業地帯は、明治後期から大正期にかけて、浅野総一郎を中心とした民間実業家による京浜運河の開削及び鶴見と川崎地先の埋立造成事業を契機に、その基盤が築かれました。第一次世界大戦による世界的な好況や関東大震災を契機とした工場移転の流れを背景に、この埋立造成地に続々と企業が立地し、今日の工業地帯の骨格が形成されていきました。浅野らによる埋立は昭和3（1928）年に完成しました。

昭和6（1931）年に勃発した満州事変を契機として重化学工業が発展すると、京浜工業地帯はさらに注目を集めるようになり、国（内務省）が、公営による造成を決定しました。これにより、神奈川県が、県営埋立事業として京浜臨海工業地帯造成事業を実施することとなります。

県営埋立事業は昭和12（1937）年から10か年継続事業の計画で、請負事業者として東京湾埋立株式会社（現・東亜建設工業株式会社）が指名され、一部が完成しましたが、太平洋戦争への突入に伴い、事業は中断となり、終戦後は戦災復興事業が優先されたため、昭和20（1945）年にやむなく廃止されました。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ

函嶺洞門の整備

かんれいどうもん



函嶺洞門

昭和6(1931)年竣工
延長100.9m 幅員6.3m
鉄筋コンクリート造

大正12(1923)年の関東大震災で国道1号は各地で土砂崩れや橋の崩落が発生するなど、大きな被害を受けました。

この復旧と併せて、県西土木事務所小田原土木センターの前身である小田原道路改良事務所が、道路を土砂災害から守る施設として昭和6(1931)年に函嶺洞門を造りました。

重要文化財としての函嶺洞門

函嶺洞門は同じ時代に造られた千歳橋、旭橋と共に自動車交通に対応した昭和初期の道路施設です。

箱根路の近代化の象徴的な施設として歴史的価値が認められ、平成27(2015)年に国から重要文化財として指定されました。



千歳橋

昭和5(1930)年竣工
橋長25.5m 幅員9.0m
鉄筋コンクリート造単アーチ橋



旭橋

昭和8(1933)年竣工
橋長39.5m 幅員10.0m
鉄筋コンクリート造単アーチ橋



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ